

患者視点で見るがんゲノム医療の進展と課題

～がんゲノムプロファイリング検査を受けた106名の患者と臨床医のギャップ分析～

安達未羽¹, 加藤里奈¹, 北村和美², 星野夏子¹, 森田十徳¹

¹株式会社インテージヘルスケア, ²株式会社プラメド

*CGP検査：がん遺伝子パネル検査（包括的ゲノムプロファイリング）



株式会社インテージヘルスケア

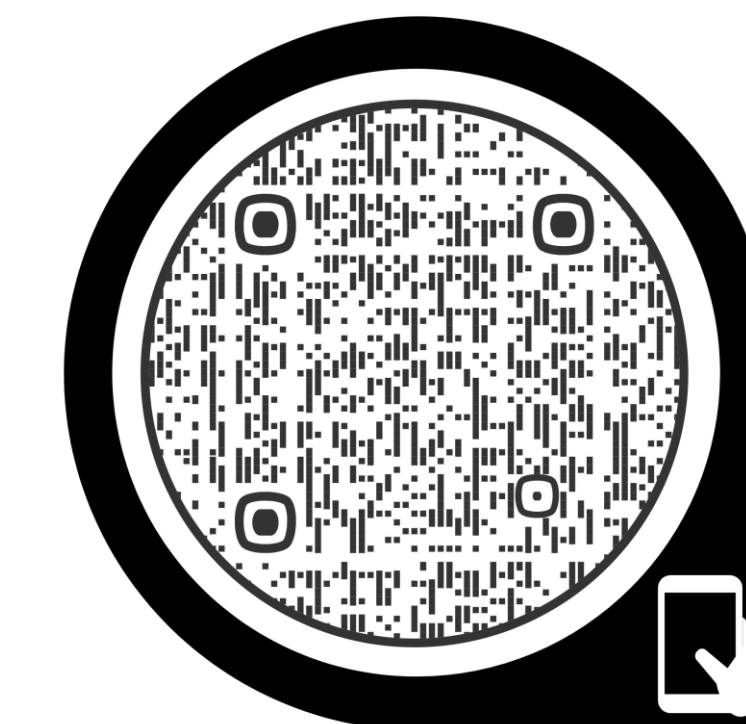
Healthier Decisions

◆医師調査発表のご案内

演題番号【P37-4】に
医師調査の発表がございます

本レポートや

その他調査レポートはこちら

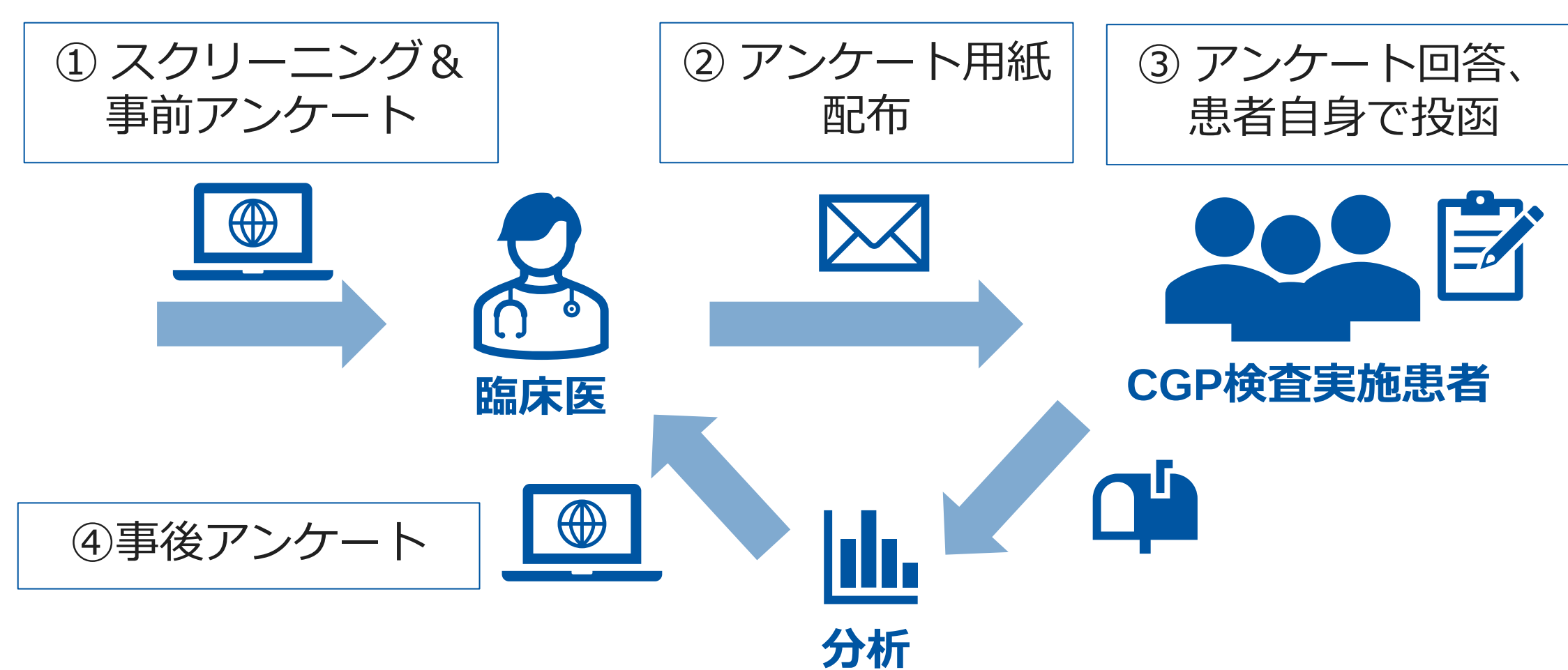


背景・目的

- 2019年の保険収載以降、CGP検査実施数は緩徐に増加しているが、保険適用の内容などにより対象患者が限定されている背景もあり、がん患者のCGP検査認知率は未だ低く留まっている。
- 主治医からCGP検査を提案されても「ゲノム」「家族性腫瘍」など専門性の高い内容に直面してしまう患者も多い。
- 本研究では保険診療としてCGP検査を受けた患者を対象に、検査に対する認知度や理解度、要望等についてアンケート調査にて収集・分析を行った。

方法

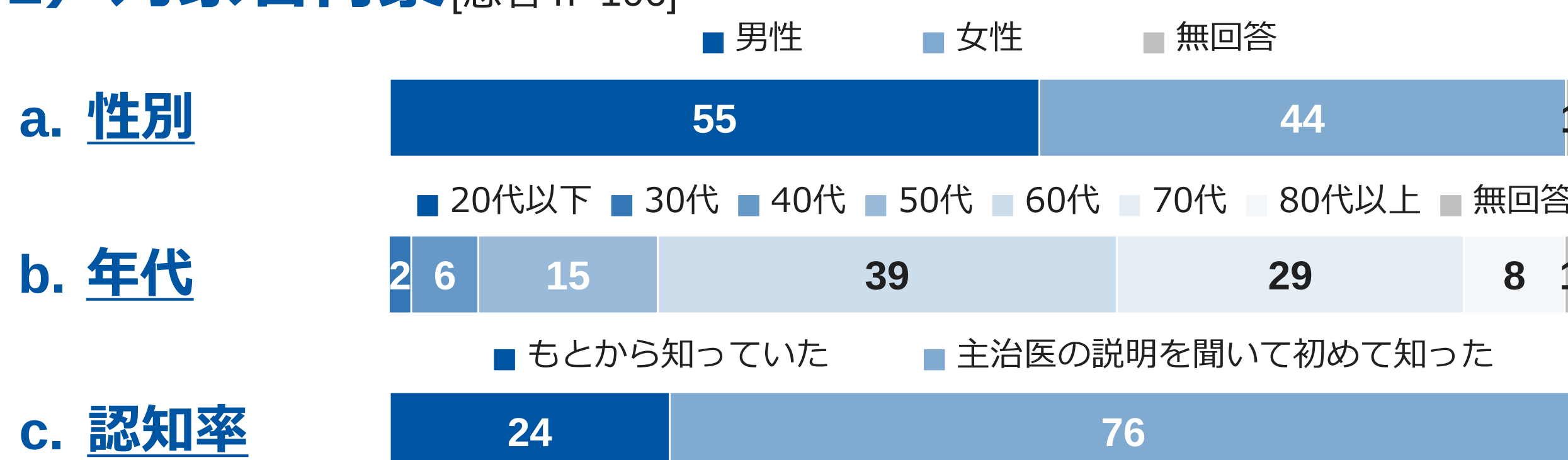
- 株式会社プラメドに会員登録のある臨床医に対し、CGP検査を行った患者へのアンケート用紙の配布をインターネットを通じて依頼した。
- 患者は匿名にてアンケートを回答し、郵送にて回収を行った。
- 調査協力医に対しても事前／事後にアンケート調査を行った。



結果

- 2023年9月に事前調査、2024年6月に事後調査を行い、インターネットアンケートにて調査協力医から回答を得た。（事前アンケート 174名、事後アンケート 59名）
- 2023年10月から2024年1月に患者アンケート調査を行い、106名の患者から回答を得た。
 - 主治医からCGP検査の話を聞いて初めてがんゲノム医療について認知した患者は**76%**。

1) 対象者背景 [患者 n=106]

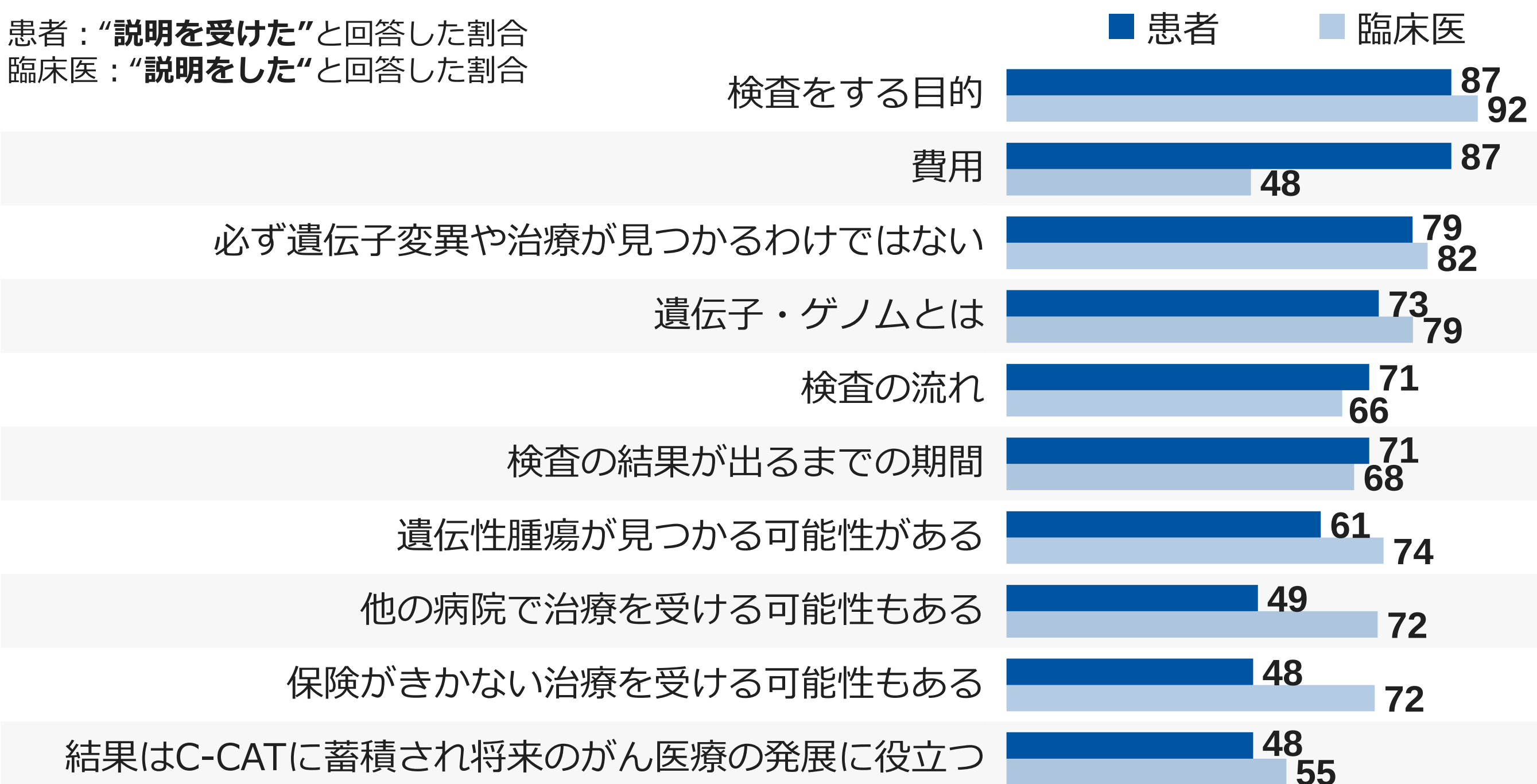


<CGP検査を受けたがん種>

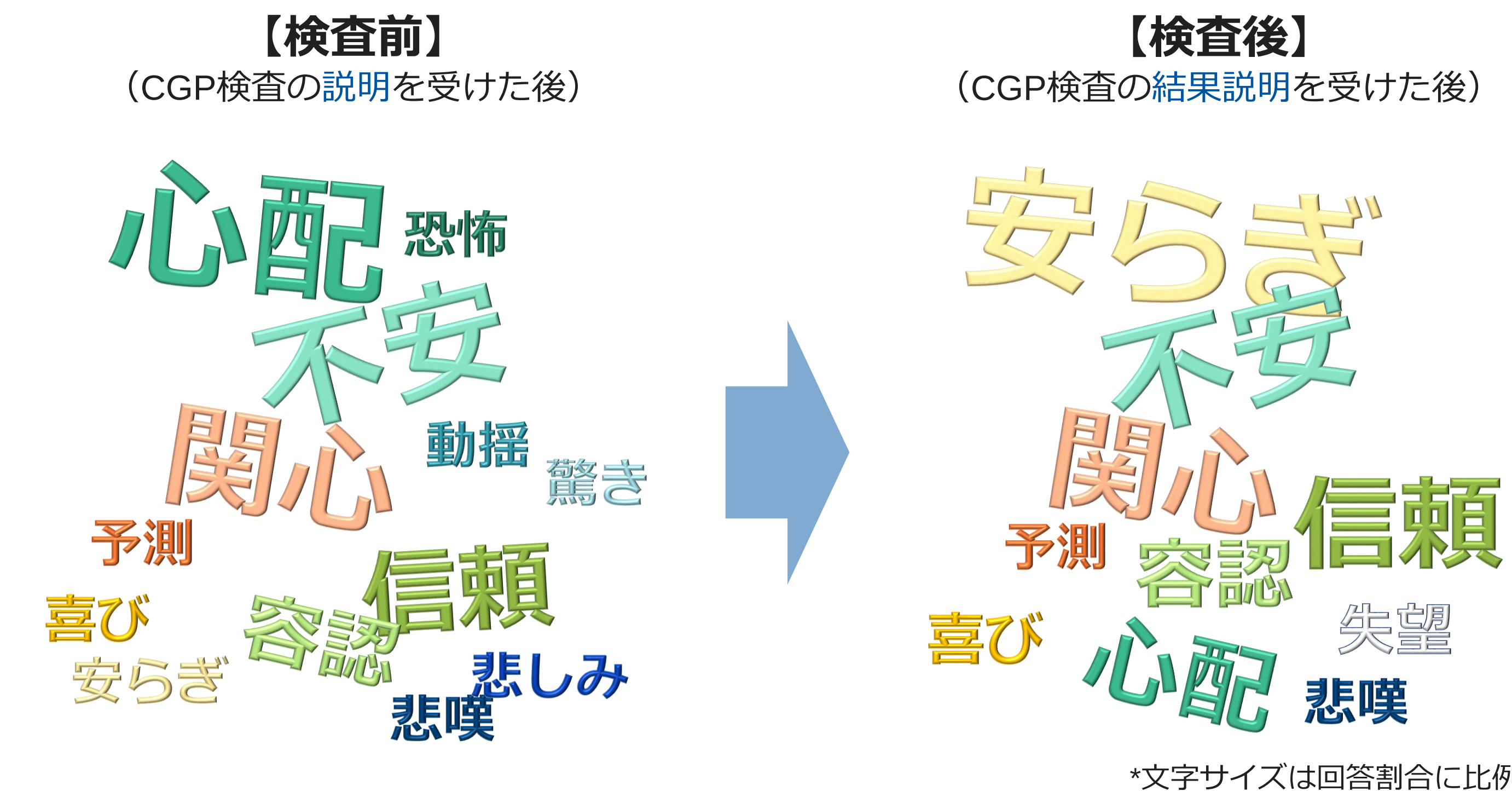
大腸がん、肺がん、前立腺がん、卵巣がん、胃がん、甲状腺がん、膵臓がん、膀胱がん、悪性黒色腫、唾液腺がん、乳がん、胆管がん、腎細胞がん、腎盂・尿管がん、子宮頸がん、その他（原発不明がん、希少がん）

2) CGP検査実施前の説明内容・実施前後の患者の感情変化

a. 検査説明内容の患者・臨床医ギャップ [患者 n=106, 臨床医 n=174]



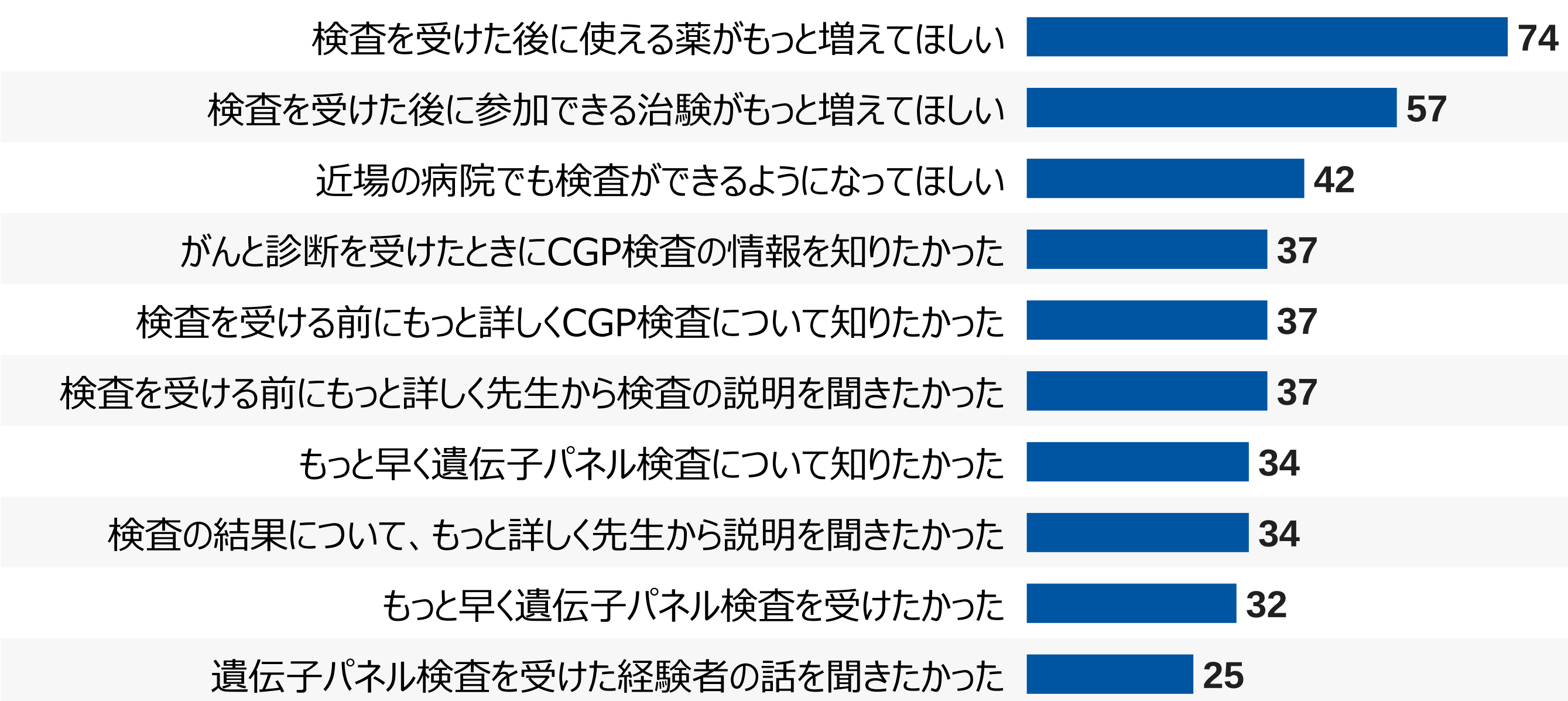
b. CGP検査前後の患者の感情 [患者 n=106]



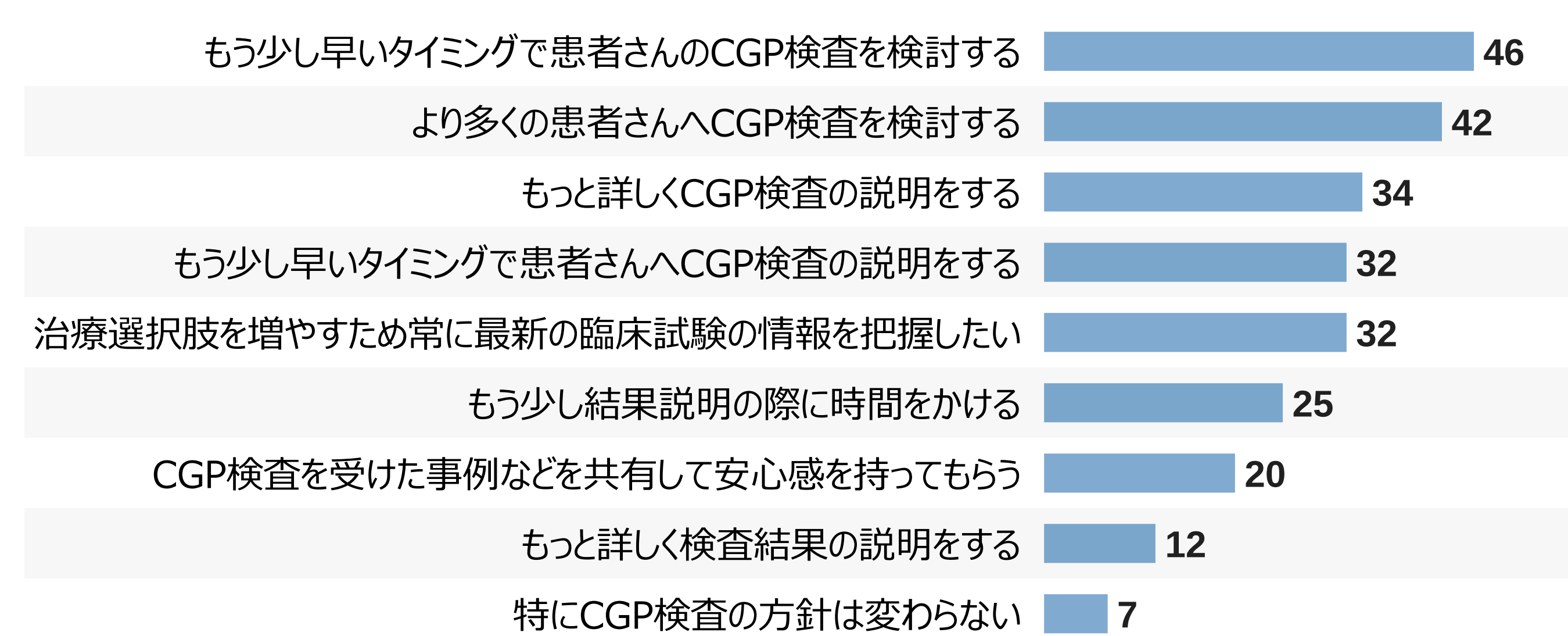
- 「検査の目的」や「必ず遺伝子変異や治療が見つかるわけではない」は患者・臨床医ともに説明を受けた／説明した割合が8～9割。
- 患者と臨床医の乖離が20ポイント以上の説明内容は「費用」「保険がきかない治療を受ける可能性」「他の病院で治療を受ける可能性」。
- CGP検査の説明を受けた後の感情は【心配】【不安】を回答した患者が多い。検査結果の説明を受けた後の感情は【安らぎ】と回答した患者が最も多いが、【不安】と回答した患者も多い。

3) CGP検査に対する患者満足度・要望と今後の検査意向への影響

a. CGP検査に対する患者要望 [患者 n=106]



b. 患者要望をふまえての臨床医の今後のCGP検査への影響 [臨床医 n=59]



- CGP検査に対する患者満足度は**51%**。*「非常に満足」「満足」と回答した割合
- CGP検査に対する患者要望は「使用可能な薬の増加」が**74%**、「参加可能な治験の増加」が**57%**。
- 患者要望をふまえ、今後のCGP検査について「もっと早く検討する」「より多くの患者さんへ検討する」と回答した臨床医が多かった。

結論・考察

- 患者のCGP検査の認知率は十分ではなく、検査の説明内容には患者・臨床医間で一部乖離が見られた。ギャップが生じる一つの要因として、患者側の理解が及んでいない可能性が示唆された。
- CGP検査に対する要望として「治療選択肢の増加」が最もニーズが高く、出口問題に対する患者側の声があらためて浮き彫りとなった。
- これら患者の想いや要望が浸透することは、今後臨床医が積極的にCGP検査を提案するきっかけにつながることを示唆されたが、「より早く」「より多く」を実現するためには臨床医の意欲だけでは難しく、制度的な見直し等の抜本的な改善が求められている。

臨床医の視点で見るがんゲノム医療の進展と課題

～アンケート調査から浮かび上がるCGP検査の保険償還後の浸透と今後の展望～

五十嵐彩香, 酒井かりん, 安達未羽, 星野夏子, 森田十徳
株式会社インテージヘルスケア



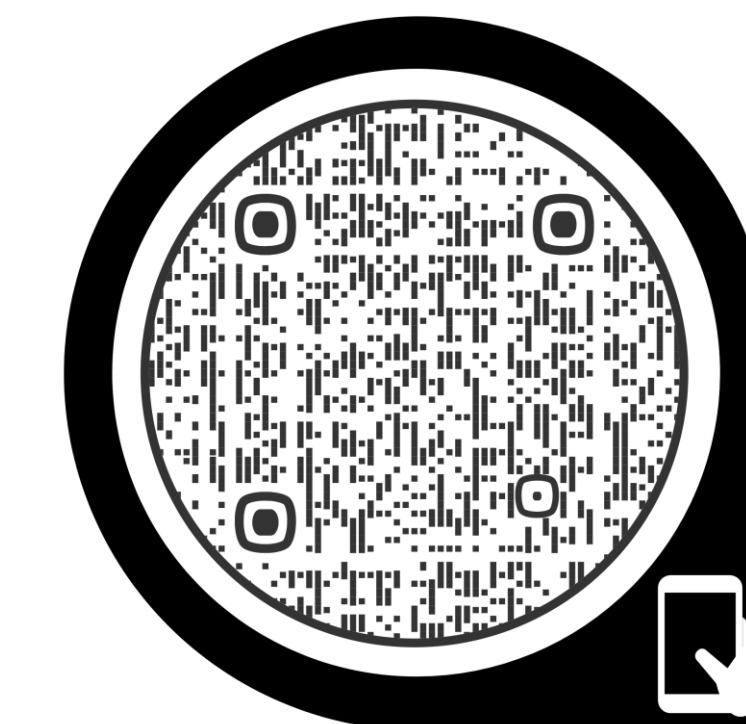
株式会社インテージヘルスケア

Healthier Decisions

◆患者調査発表のご案内

演題番号【P37-5】に
患者調査の発表がございます

本レポートや
その他調査レポートはこちら



*CGP検査：がん遺伝子パネル検査（包括的ゲノムプロファイリング）

背景・目的

- がんゲノム医療が臨床実装された2019年以降、我が国におけるCGP検査の認知度や実施率、治療到達率に関する変遷が注目されている。
- 本発表では、定期的に実施されたアンケートデータを基に、先述の指標の推移と、臨床医から見た遺伝子検査における現在の課題を分析する。
- これらにより、がんゲノム医療の普及に向けた取り組みを評価し今後の課題を明らかにする。

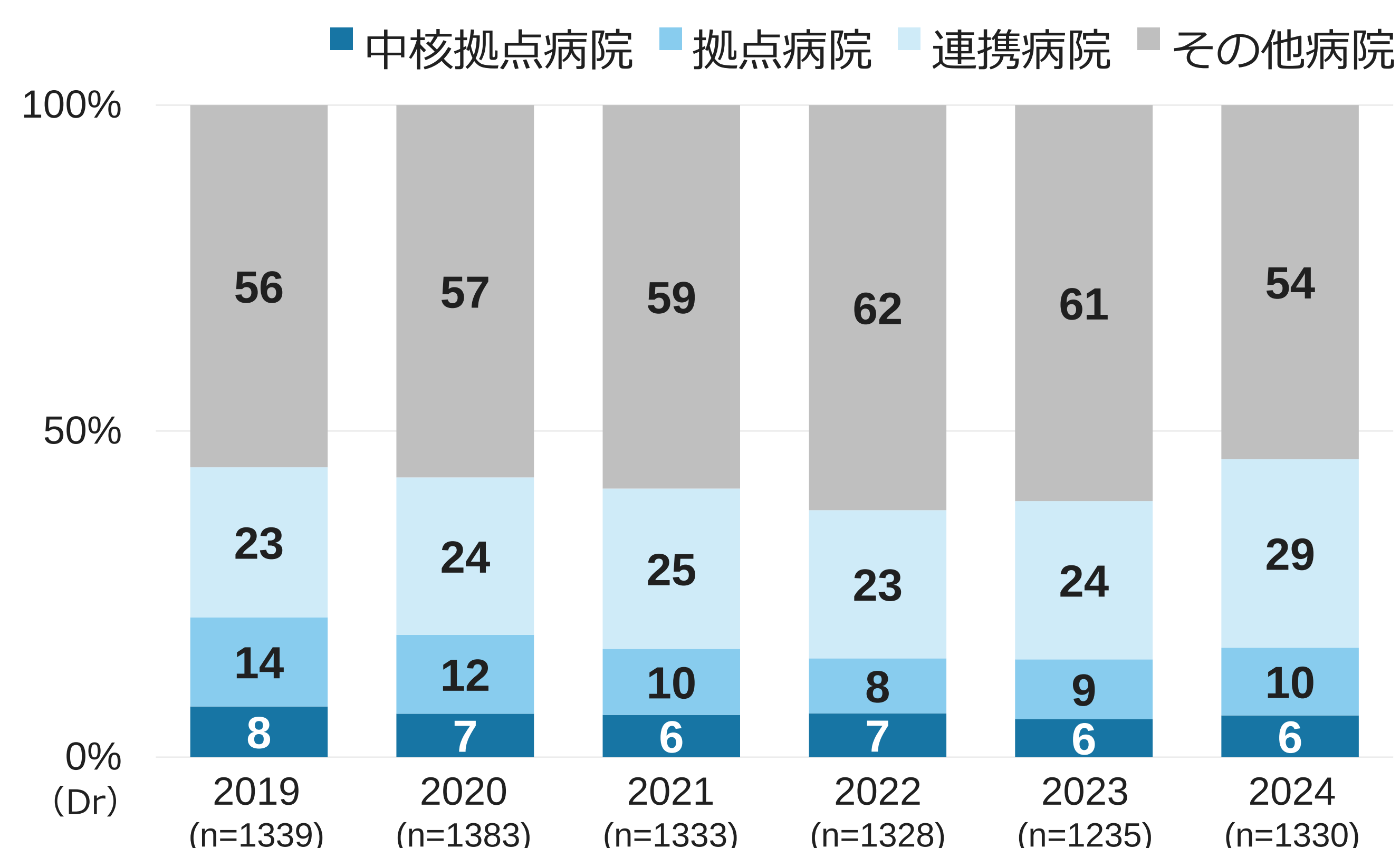
方法

- 株式会社プラメドに会員登録のある、進行または再発の固形腫瘍患者に対して抗がん剤治療を行う臨床医を対象に、インターネットアンケート調査を実施した。
- 2019年より毎年1～2回経時的に実施し、各回約1,300名の回答を得た。
- 収集したデータは全て匿名化され、CGP検査の認知度、実施率、治療到達率等に関する統計分析に使用した。

調査時期

2019年	2019/11/18～29	2022年	2022/10/19～26
2020年	2020/11/17～30	2023年	2023/10/16～23
2021年	2021/11/11～22	2024年	2024/10/8～17

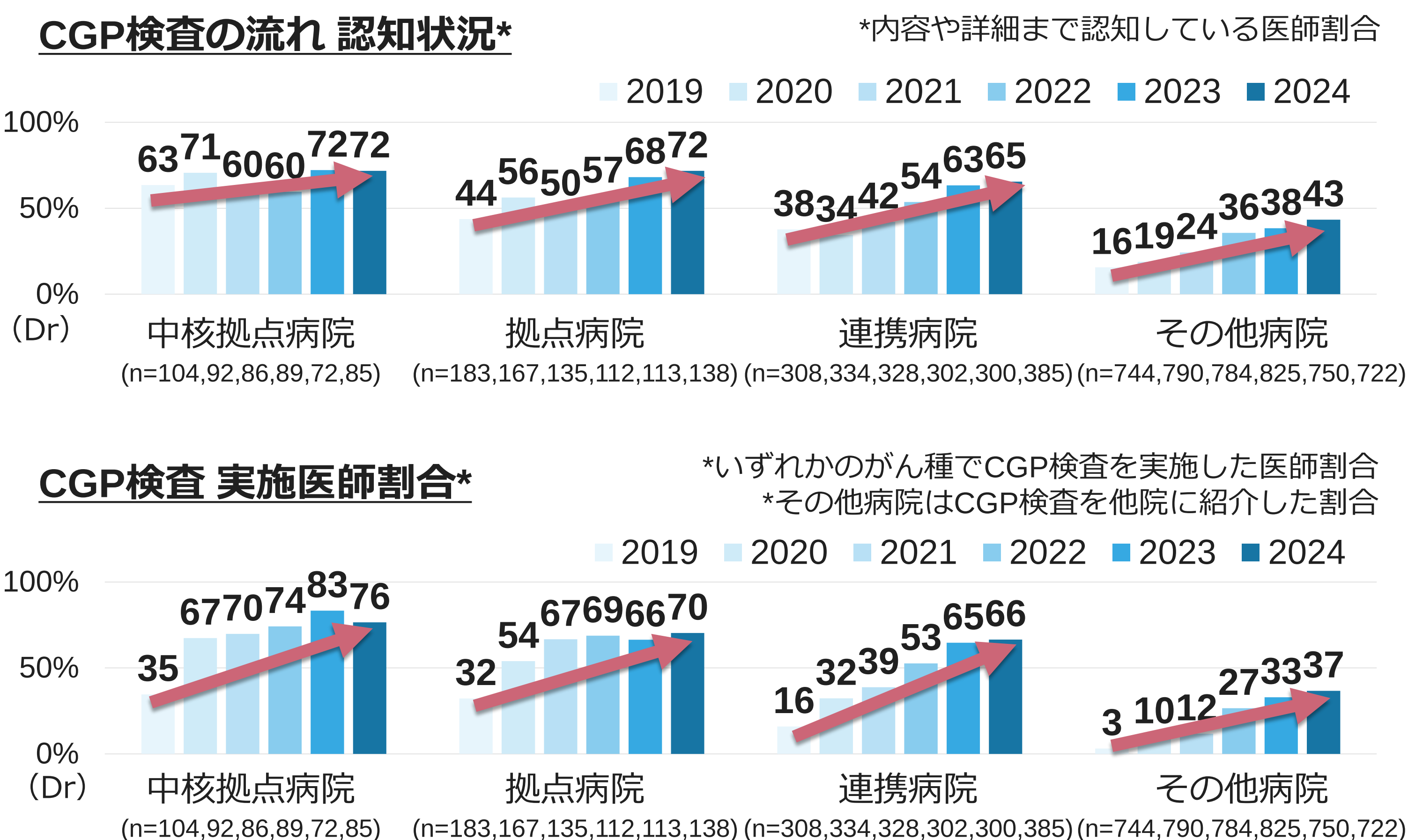
対象者背景（回答医のがんゲノム医療病院の所属状況）



*「その他病院」はがん診療連携拠点病院も含む

結果

1) CGP検査の認知と実態の変遷

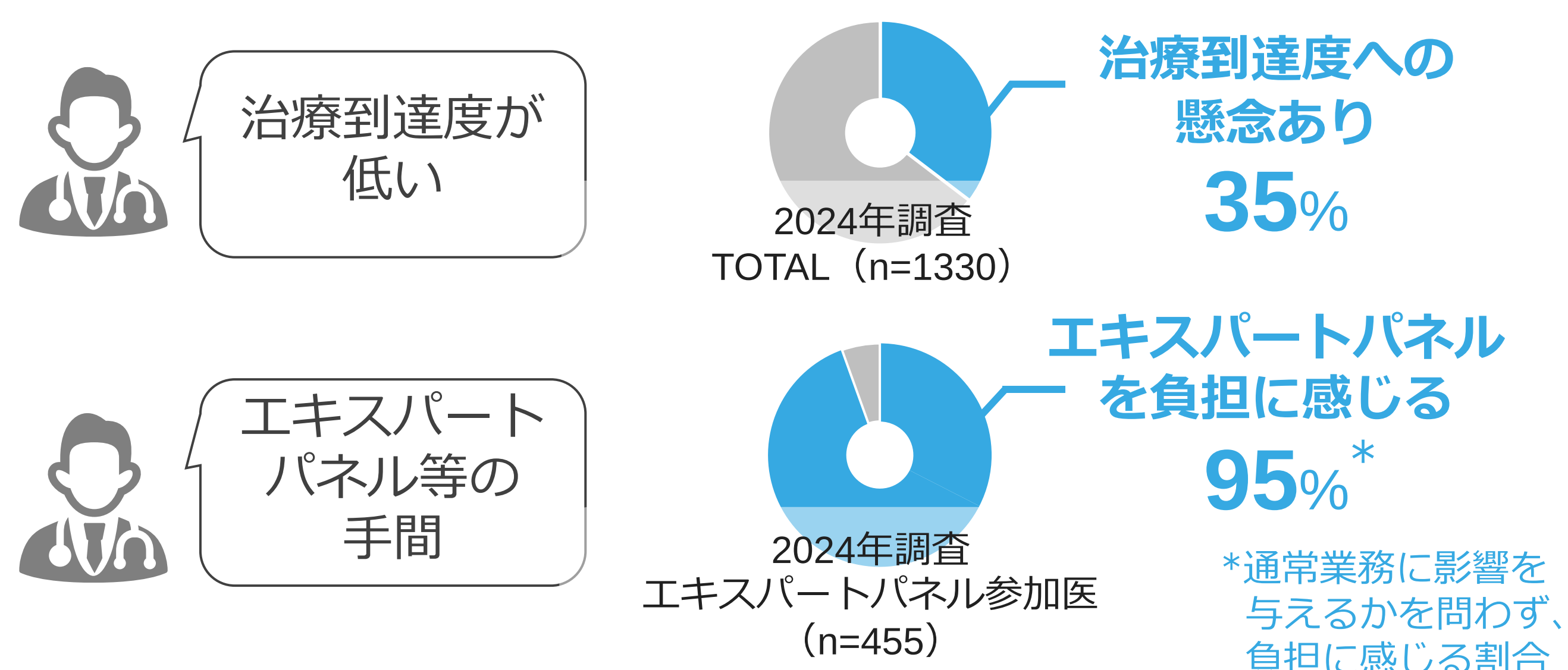


- いずれの施設でも、2019年から2024年にかけてCGP検査の認知度とCGP検査を実施（他院紹介）している医師割合が増加していた。
 - 施設形態別で比較すると、がんゲノム医療病院に比べその他病院における認知度、実施割合は低い結果であった。
 - がん種別のCGP検査実施患者割合も増加傾向が見られるものの、2024年時点でも10～20%に留まっていた。
 - がん種で実施割合を比較すると、特に小児固形がんや悪性骨軟部腫瘍、胆道/肝臓/膵臓がんのCGP検査実施割合が高かった。
- また、2024年調査結果において「CGP検査の適応となる患者*」のうち「CGP検査の説明をした患者」は65%であり、適応となる全ての患者にはCGP検査の説明をしていないことが示された。

*標準治療終了（見込み）で、臨床試験等の組み入れも考慮しPSや臓器機能が良好な患者

2) 臨床医から見たCGP検査の課題点

主に考えられる課題として、以下の2点が浮かび上がった。



<2024年調査結果より>

- CGP検査に対する課題を確認したところCGP検査の治療到達度の低さに対する懸念度が最も高く、35%の医師が課題であると回答した。同割合は、がんゲノム医療病院、その他病院別でも差は見られなかった。
 - 実際にCGP検査を実施し何らかの治療に到達した患者割合は20%程度であり、そのうち保険適用の薬剤が半数以上を占めた。
- また、エキスパートパネル参加医の95%はエキスパートパネルを負担に感じていた。
 - 事前準備や患者説明を含めると平均5.9時間を要していた。
 - 一方でシステム導入といった効率化施策を導入している施設は約半数程度に留まった。
 - 負担の大きさと治療到達度が見合っていないことが、CGP検査に対する大きな懸念のひとつであることが示唆された。

結論・考察

がんゲノム医療が保険適用となった2019年以降、CGP検査の認知率や実施率は年々増加傾向をたどっている。ただしがんゲノム医療病院とその他病院では認知率や実施率に差が見られており、施設形態によるCGP検査の浸透度にはまだ課題が残されていた。

また、CGP検査の適応があるにもかかわらず説明がされていない患者がいることが明らかとなった。その理由としては、治療到達度の低さやエキスパートパネル等の負担感といった、臨床医側のCGP検査に対する懸念が強いことが想定される。

治療到達度の低さに関しては、国内の参加可能な臨床試験の少なさや都市部/地方のエリア問題も要因であると考えられる。本調査内でDCTの認知も聴取しているが詳細まで認知している医師は1割程度であったため、エリアに捉われない治療選択のためにもDCTの認知拡大は必要である。またエキスパートパネル等のCGP検査にかかる負担効率化の施策は未だ半数程度の導入率であり、施策導入の推進や制度の見直しも視野に入れるべきと考えられる。

CGP検査を受けるべき患者の治療機会を逃さないよう、CGP検査に関する正しい理解の拡大および制度の見直しや負担削減の施策を行いながら、臨床医の懸念や負担を減らすことが求められる。